

れき ぶん

となん歴史民だより vol.31

Morioka tonan history and folklore museum

平成 24 年 6 月 28 日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228



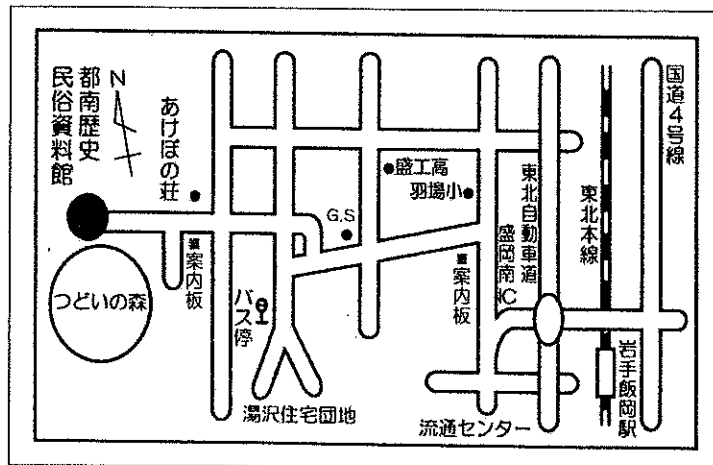
都南歴史民俗資料館所蔵
「浮世絵（豊国筆）」

是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

- ・盛岡市都南歴史民俗資料館館長 玉川英喜「都南の遺跡-その1-」
- ・原敬記念館の紹介
- ・資料は語る⑩
- ・盛岡市所在 指定・登録文化財紹介⑩
- ・となんの昔ばなし⑩

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から 午後4時まで
- 入館料 無 料
- 休館日 月曜日 (休日に当たるときは、直近の平日) 年末年始

都南の遺跡(その1)

盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 玉川英喜

遺跡の発掘調査は毎年至るところで行われています。最近の10年だけでも岩手県内で1,000件以上の調査が行われています。しかし、一般的には余り馴染みがないのではと思われます。今回の「歴史だより」では、遺跡が歴史解明に大きな役割を果たし、より身近に興味をもっていただけるよう盛岡市都南地域(旧都南村にあたる地域を中心に)の遺跡紹介を通して、発掘調査や遺跡について触れてみたいと思います。

都南地域には、縄文・弥生から中・近世に至る遺跡が140カ所以上あります。そもそも遺跡とは、「過去に人間の生活が営まれた痕跡を地下あるいは地上になんらかの形でとどめている所(『日本史辞典』角川)」とされていますので、遺跡は至る所にあります。岩手県内では1万カ所を超えとも言われています。では、地下に眠っている遺跡はどのようにしてわかるのでしょうか。一般的には、土器や石器などの遺物(過去に人類がかかわって残した「モノ」を総称して「遺物」と言います)が散らばっている状況や地形等を地表面から観察する分布調査という方法で確認したり、試掘調査といって一部を掘って遺物の有無や生活の痕跡を確認したりする方法で行います。都南地域の遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡は東部及び西部の山地から低地への変わり目となる山麓緩斜面や丘陵、沢筋に多く見られます。また、奈良・平安時代の遺跡は平地の微高地や段丘上に広がっていることが多いです。遺跡の調査は一般的に、開発等によって現況が損なわれる場合に行う緊急調査と大学や研究機関等によって行われる学術調査とがあります。現在日本で行われている遺跡発掘の大多数は、前者の緊急調査と言われるものです。

都南地域でもこれまで多くの遺跡が調査されていますが、そのほとんど(全てといってもいいくらいですが)は、開発に伴う緊急調査です。昭和40年代末から50年代にかけては東北新幹線や東北縦貫自動車道建設に伴う調査が大規模に行われました。また、平成になってからはいわゆる盛南開発の進展とともに、区画整理・宅地造成等に伴う調査が数多く行われています。これまでの調査で、縄文時代の大規模な集落跡や国重要文化財に指定された「遮光器土偶」、さらには奈良・平安時代のいくつもの集落跡や古墳群等々、貴重な資料がたくさん見つかっています。こうした調査によって、縄文人の生活や精神文化の一端を窺い知ることができたり、安倍氏や平泉藤原氏に連なる時代の背景となる奈良・平安時代の様子についての理解を深めたりすることができます。

今回は国重要文化財「遮光器土偶」が出土した縄文時代終末期の代表的な遺跡、「手代森遺跡」を簡単に紹介します。他にも都南地域には、一覧表に掲げたような縄文時代の湯沢遺跡や奈良・平安時代の貴重な遺跡が多々ありますので、機会を見て順次紹介したいと思います。

【手代森遺跡】

手代森遺跡は手代森小学校の南側にあり、古くから縄文土器片などが多数採集される場所として知られていました。昭和59年に、手代森小学校の学校用地拡張に伴って当時の都南村教育委員会が、また大沢川河川改修に伴って県埋蔵文化財センターがそれぞれ調査を行っています。村教委の調査では竪穴住居跡は見つかりませんでした。なお、およそ2,500年程前の縄文時代晩期といわれる時期を中心とした土器等が多数出土しています。また、県埋文センターの調査でも大量の土器(パン箱で370箱余、復元個体900余)、土製品(500点余)、石器・石製品(23,000点余)等が出土しています。また、縄文晩期の竪穴住居跡8棟や土坑といわれる穴の跡30余りが見つかっています。出土遺物の中には国の重要文化財に指定された遮光器土偶があります。この土偶は高さ31cm、遮光器土偶としては日本最大級です。実物は現在岩手県立博物館にあり、当館にはそのレプリカが展示されています。手代森遺跡について調査担当者は「祭祀的な性格が強い集落で、狩猟・漁労、土器・石器の製作、交易も行われていたと考えられる(手代森遺跡発掘調査報告書1986年)」と報告しています。縄文終末期の生業や精神文化を窺い知ることのできる貴重な遺跡といえます。

【都南地域で調査された主な遺跡】

遺跡名	調査主体	調査年	主な内容
高館古墳	県史跡調査員	S8	土師器、須恵器、蕨手刀 2、切子玉、鉄製轡
下羽場	岩手県教育委員会	S49～51	平安時代集落跡 東北自動車道建設
湯沢 A	〃	S49・50	平安時代集落跡 〃
湯沢 B	〃	S49・50	平安時代周溝 〃
稲荷	〃	S49	平安時代集落跡 〃
湯沢	岩手県埋文センター	S52	縄文前・中・後期集落跡 宅地造成
百目木	都南村教育委員会	S53	奈良・平安集落跡 平成にも調査有り 店舗建設
西鹿渡	都南村教育委員会	S55	奈良・平安集落跡 平成にも調査有り 店舗建設
手代森	〃・県埋文センター	S58	縄文晩期集落跡 河川改修・校地拡張
乙部遺跡群	盛岡市教育委員会	H5～9	縄文、平安
飯岡才川	〃・県埋文センター	H10～23	奈良・平安集落跡、古墳群
飯岡沢田	〃・埋文センター	H13～22	奈良・平安集落跡、古墳群
飯岡林崎	岩手県埋文センター	H13・14	平安時代集落跡、多量の炭化米、水田跡？
高櫓 A	盛岡市教育委員会	H15～21	奈良・平安時代集落跡
館野前	〃	H22	平安時代集落跡、礫石経塚 他

原敬記念館紹介

原敬記念館は、原敬を顕彰するために生誕地に建設された建物です。原敬先生遺品保存会会長の国分謙吉の発案により昭和 33 年（1958）に谷口吉郎博士の設計により建設されました。その後、昭和 48 年（1973）に小ホール、昭和 63 年（1988）に展示室が増築されます。敷地内には、原敬生家や腰越荘から移築された書斎、「弓掛けの松」、「戴き桜」等があり風情ある佇まいです。また、『原敬日記』全 83 冊や原敬関係文書 3,000 点、書簡 2,400 通余りを所蔵しており、原敬の事績を調べるには欠かせない場所です。参考・引用：『平成 22 年度原敬記念館館報』（同館、2010）。

◆開館時間：9:00～17:00（入館は 16:30 まで）

◆休館日：毎週月曜（祝祭日の場合は翌平日）

年未年始（12月29日～1月3日）

◆入館料：〈個人〉一般：200 円/小中学生：50 円

〈団体〉一般：120 円//小中学生：30 円

盛岡市内に住所を有する 65 歳以上の方は無料

◆所在地：盛岡市本宮四丁目 38 番 25 号

◆お問い合わせ：019-636-1192 (Tel) /019-636-1185 (Fax)

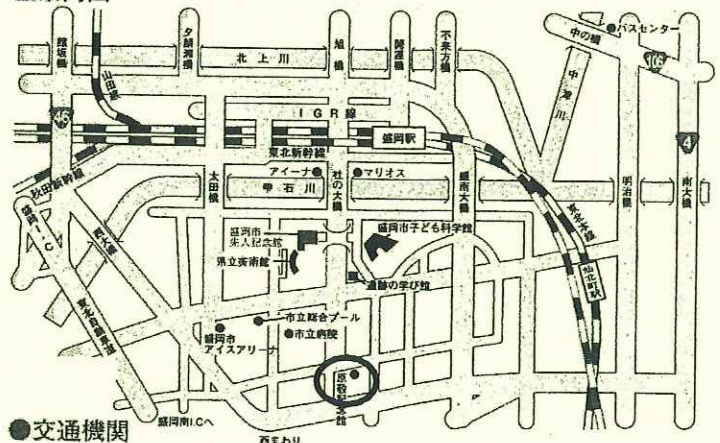
◆展示内容：原敬に関する資料

◆交通アクセス【バス】「原敬記念館前下車」：盛岡駅発着盛南ループ 200/矢巾営業所行本宮・羽場線

「もといち泉公園前下車」徒歩 5 分：イオンモール盛岡南線

【車・タクシー】盛岡駅から約 5 分

案内図



原敬記念館事業案内 (7~9月迄)

・市民参加型作品展示スペース

「ギャラリー逸山」作品展示募集

- ①7月1日(日)~31日(火) 〆切終了
- ②8月1日(水)~31日(金) 〆切7/10
- ③9月1日(土)~30日(日) 〆切8/14

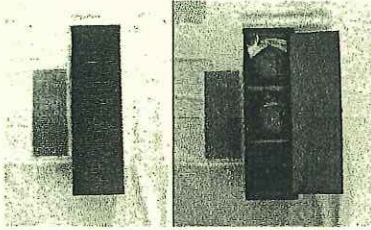
・原敬生家開放

- ①夏季：7月28日(土)~8月19日(日)
- ②秋季：9月15日(土)~10月8日(月)

生家開放は9時から16時まで

※その他の事業については、原敬記念館へお問い合わせください。

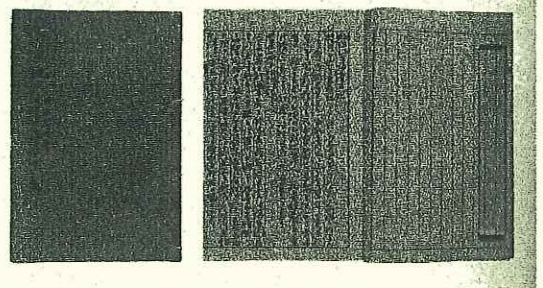
資料は語る③



【手榴弾消火器】

今回は、ちょっと珍しいものをご紹介します。それは、「手榴弾消火器」です。これは、株式会社笹井商会在(群馬県高崎市)が考案し、昭和30年(1955)前後に販売したものです。ガラス玉の中には消化液が入っており、このガラス玉を火の元目がけて投げ入れます。すると、ガラス玉が割れ、中の消化液によって消火されるというものです。これと良く似たものに戦時中使用された「防火砂弾」というものがあります。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介③



原敬日記全 83冊付絶筆メモ本箱1冊

原敬19歳の明治8年(1875)から晩年65歳の
大正10年(1921)までの自筆の日記です。83冊目は表紙と「目録、大正10年日記」の文字のみ記され、東京駅構内で暗殺される直前の絶筆が鉛筆書きのメモと残されています。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

『狐をだました話』

となんの昔ばなし三十一

昔、大ケ生の江柄にまだ、家が二、三軒しかなかった頃です。江柄の一のせき(朝島山の麓)という所に一軒の家があり、お爺さんとお婆さんが住んでおりました。お爺さんは、右の目が悪く片目でした。少しの畑を耕し、野菜等を作り、山から薪をとってきてはそれを売って暮らしておりました。その頃、この辺りでは狸や狐も住んでおり、時々人家に来ては作物を盗んでいきました。人の良いお爺さんとお婆さんは、怒りもせず、そのような狐等に残り物などをあげていました。

ある日のこと、お爺さんが町へ薪を売りにいきましたが、なかなか帰ってきません。お婆さんが心配していると、「今帰ったよ」と元気よくお爺さんが帰ってきました。しかし、よく見てみると、悪いはずの右目は見えており、悪くないはずの左目が見えなくなっていました。また、お爺さんのお尻からは、尻尾が生えています。 「ああ、これは狐だな」とお婆さんは気づきましたが、知らん顔をし、ひとつ騙してやることにしました。「お爺さん、いつも帰れば吠え込んで休むんだが、今日はいいんだが？」と言うと、「なんだ、吠え込んで休むのが一番いい」と言っている中に入っていました。お婆さんは、吠え口を閉じてしまいました。すると、お爺さんが帰ってきました。お婆さんは、狐がお爺さんに化けて吠え入れられるまでの話を聞きかせてあげました。翌日、やさしいお爺さんとお婆さんは縄を外し、狐を逃がしてやりました。その後、狐は悪さをしなくなりました。

出典『となんの民話』(都南歴史民俗資料館、一九八八)。